

## 2010年 学会セッション報告

セッション名：ヒュームとスミス（スコットランド啓蒙思想研究）

世話人：篠原久（関西学院大学）

報告者：坂本達哉（慶応義塾大学）

討論者：壽里竜（関西大学）

出席者：20 数名

デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスは「スコットランド啓蒙思想」の主流に位置する人物ではないが、彼らの思想は、当時の主流派との交流および対比によってその特徴がより明確になるという側面をもっている。「ヒュームとスミス」の会は、本学会でのセッションのほか、「日本イギリス哲学会」大会前日の研究会（3月下旬）でも開催されているが、双方の研究会においてヒュームとスミス以外の思想家で報告のテーマとして取り上げられた人物としては、フレッチャー、プーフェンドルフ、カーマイケル、デフォー、ジェイムズ・ステュアート、フランクリン、などがあげられる。スミスとヒュームの想源、当時の思想家との交渉、後世への影響等を中心とする「スコットランド啓蒙思想研究」が本セッションの目的とするところである。

今回のセッションでは坂本会員から、「いわゆる『初期覚え書き』とヒューム経済思想の形成」というテーマで約1時間の報告がなされた。当日配布された資料は22ページの本文（フルテキスト）と10ページの資料編からなり、当日の報告の趣旨は、問題のヒューム「覚え書き」の執筆時期を確定し、その意義ないし目的を探ろうとするものであった。「覚え書き」での古今の著者からの抜粋と、刊行されたヒューム諸著作からの引用との詳細なクロスレファレンス、ならびにヒューム書簡への言及等によって、「覚え書きの執筆開始時期」が「1747年7月から11月までの4ヶ月間」、すなわち「ヒュームがセント・クリア将軍との第一回目の随行を終え、次の仕事を待ちながら故郷のナインウェルズ過ごした短い期間」であって、その目的が『政治論集』（1752年）の刊行にあるという結論がくださった。その執筆時期の特定作業を通じて、ヒュームにおける経済思想の形成過程のみならず、ロバート・ウォレスやギルバート・エリオットをはじめとするヒュームの交友関係にも新たな視点が投げかけられた。今回の報告の原型となる英語版は（テキストの注によれば）、コロンビア大学バーナード・カレッジでの「ヒューム経済思想セミナー」（2003年5月）で発表されたものであったが、今回の報告の成果は *Hume Studies* 誌上に掲載されるということである。

このヒュームの草稿に最初に注目した J. H. バートン（『ヒュームの生涯と書簡』1846年の著者）は、その執筆時期を『人間本性論』（1739-40年）出版直後から『政治論集』以降までの広範囲に設定していたが、『ヒューム伝』の著者の E. C. モスナーは、エディンバラ王立協会に所蔵されていた当該草稿を「ヒュームの初期の覚え書き」と題して1948年の

*Journal of the History of Ideas* に発表し、その執筆時期を『人間本性論』以前に求め、その特徴を「とりとめのない」抜き書きノートだとした。この「初期説」にたいして、「現代を代表する哲学史的ヒューム研究者のひとり」である M. A. スチュアートは（2000 年と 2005 年の論文において）、モスナー解釈の種々の杜撰さを批判しつつ、かつヒュームが経済問題に示した関心に触れながらも、結局のところその執筆時期を 1740 年代の前半に限定するものであった。これら四者（バートン、モスナー、坂本、スチュアート）の解釈が、討論者の壽里会員によって「ヒューム略年表」を用いながら、手際よく整理された。その討論者自身の解釈は、ヒュームが「覚え書き」で引用している著作と、ヒューム自身の蔵書との重複関係を調べるというものであった。その重複の割合の少なさから壽里会員がくださった「執筆（開始）時期」にかんする結論は、「ヒューム自身が蔵書にアクセスできず、なおかつ他人の蔵書を読む十分な時間があった時期、・・・すなわち、1745 年 2 月末から 46 年 4 月 16 日、ヒュームが自宅を離れ、アナンデイル侯の家で（ロンドンの北西 20 キロにあるセントオールバン付近）の家庭教師をしていた時期」というものであった。

当日の会場からの質問としては、坂本会員が言及した「覚え書き」、『政治・道徳論集』旧版（1741・42 年版）、およびその新版（1748 年）での数値（データ）の変更や、典拠の明示の有無に関するものであった。一般のオーディエンスにとっては当日の報告は少々専門的に過ぎる感があったかも知れないが、特定の資料をめぐる詳細な解釈から、思想家の関心領域の変遷、他の思想家との交流関係、および書簡の新たな角度からの利用等、広範にわたる副産物が生まれうるという有益な報告と討論であった。